
世にも微妙な物語

moc

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世にも微妙な物語

【Nコード】

N4932J

【作者名】

m o c

【あらすじ】

短編の小説集です。あまり長くないので、暇潰し程度に見てください。ジャンルはコメディやホラーなどいろいろありますが、最後にオチは付けて行きたいと思います。一話目のあらすじは、痴漢に携帯電話を取られた友達を救うべく、主人公が作戦を立てます。主人公の作戦は見事成功するのかをお楽しみ下さい。

痴漢撃退指令「ジョウシテパンチセヨ!!」

スーパーコンピューターと呼ばれる私の頭脳はフル回転で稼動していた。作戦にミスは許されない。そのため、あらゆる手段を用いて作戦を立てなければならなかった。なぜなら親友の優子が最悪の事態で痴漢に狙われていたからだ。

彼女は見た目が大人しく、性格もおっとりしていたため、痴漢に遭うこともしばしばあったが、今回の最悪のケースであった。なんと痴漢は優子の携帯電話をくすね取り、返してほしければ指定の場所に来るように脅してきたのだ。私たちの高校は携帯電話持込禁止で、見つければ停学の堅物高校である。なおかつ、両親にばれたら大目玉確実のため、誰にも相談できずに悩んでいたそうなのだ。あの子が悩んでいることに気付いた私は悩みを聞き出すことができ、親友を助けるため作戦を立てる事となった。

現在は優子の部屋中で、机を挟みながら向かい合って座っていた。目の前の親友は表情を落し俯いていた。痴漢から、無事携帯電話を取り戻すなんて、物理のテストより難しいと感じているのであろう。とりあえず、彼女を元氣付けるため、お土産に持ってきたクッキーをお皿に盛り付けた。

「ごめんね。私なんかのために」この言葉は優子が悩んでる時に出る口癖だった。

この言葉がすっかり出たことで、私は彼女の悩みに気付くことができたのだ。

「いいってことよ、親友でしょ。そんなことより元氣を出さないといい解決策が見つからないよ」

問題は相手が得体の知れない痴漢だという事だ。出来ることなら痴漢とあの子を会わしたくない。

「やっぱり無難なのは、警察か親に連絡じゃない?」

「それが出来たらこんなに悩まないよ」

「そう・・・・・・・・・・だよね」

真面目な優子が携帯電話をこっそり持つのは理由があった。それはズバリ恋である。最近、憧れていた直樹くんと仲良くなり、メールで恋を育てているところであった。警察や親が絡むと当然明るみになり携帯電話は没収、恋のチャンス逃してしまふ。そんな理由もあって親にばれたくないのである。ここは危険だが痴漢から直接携帯電話を取り返すしかなさそう。

伊達にスーパーコンピューターの異名を持つ私じゃない。もう頭の中で作戦は弾き出されていた。この作戦なら携帯電話を取り戻すことが出来るが・・・・・・・・・・

問題は彼女がこの話に乗ってくれるかだ。

『やるしかない』

私は決意を固めると、優子に話を切り出した。

M i s s i o n S t a r t

「じゃあ、痴漢と会って携帯電話を取り返すしか方法はないね」お土産のクッキーとチョコクッキーを手に取ってそれぞれお皿の空きに置いた。

「痴漢と会う時、私も同行するわ」そして、もう一枚クッキーを手にとるとさっきのクッキーの上に重ねた。

「そんな・・・・・・・・危険だよ」

「まずは安全最優先。危険な目に遭いそうになったらどちらかが逃げて警察に電話するの。一人は危険すぎる」

これは優子の身を守る為の最低条件。言わば保険だ。
「でもこれは私の問題だし・・・・親友を危険な目に合わせたくないの」

「それは私も同じ気持ちだよ。それに私アツタマ来てるんだ。痴漢の癖に卑劣な手を使って優子に手を出そうなんて」重ねたクッキー

の一枚を手にとるとチョコクッキーにぶつけて弾いた。

「女の子一人で痴漢に会いに行くなんて、ヤツて下さいって言うて
るようなもんよ。それなら先に警察に連絡させてもらうよ」

私が強い口調で言うのと優子は困った表情を見せたが、暫く考えた
後、答えを出した。

「分かった・・・じゃあ護衛をお願いするわ。危ないときは
助けてね」

「まかしときな」

私は笑顔で持っていたクッキーを口に入れた。

まずは第1段階クリア。しかしここからが正念場、あの子に悟ら
れないように作戦に乗せて行かないと計画が破綻してしまう。

「男の人相手に女の子二人じゃあ部が悪い。まずは争わずに携帯電
話を取り返す方法を考えましょう」

「そうだね」

この意見には彼女も賛同してくれた。

「じゃあこんな作戦はどう。自分の着信音は覚えてるよね？」優子
は頷いた。

「痴漢と会ったら私がユウの携帯電話に電話をするから、携帯電話
の場所を把握しなさい。そのあと私が携帯電話を持っている証拠を
見せろって言うから、相手が出てきたらすぐに奪い取る。奪った
らあなたも私もすぐに逃げる。そして、警察署もしくは人の多いと
ころに行くの。人前ではさすがに乱暴なことは出来ないしね」

「けど、痴漢がちゃんと持つてくるとは限らないんじゃない？」

「そうね。その可能性もあるし、持つていても素直に出さない可能
性もある。だからこの計画は第1段階。まだ次の手も考えてある」

私は身を乗り出し彼女の顔をじつと見つめた。

「あなた、弟と顔が似てるよね」

優子の家にはよく来るので、弟の顔を知っている。二人は双子か
と思えるほど顔立ちが似ていた。

「弟の学生証を見せて、実は男でしたってカミングアウトするの。」

相手が男だと分かると興味を無くすんじゃない？」

優子は身を乗り出して強い口調で言った。

「それは無理よ。弟の学生証がどこに在るかわからないし、弟から借りるには理由を話さなきゃならないし、それに……………」
目を逸らして口ごもった。

「それになに？」

「体を触られているし……………」

「……………なるほど」

「とにかく、家族に知られるのは絶対やなの」

よほど恋のチャンスを大事に考えてるらしい。メールだけが直樹くんとの接点って訳じゃないだろうに。

本当に自分の身が危ないって感じてるんだろうかね、まったく。

まあ……………そんな不器用な性格、嫌いじゃないけどね。私は覚悟を決めると真剣な顔で彼女を見つめて、最後の作戦を切り出した。

「じゃあユウにそれなりのリスクを負ってもらおう……………二人で痴漢を倒す」優子が驚きの表情を見せた。

「だって、さっきは女の子二人じゃ敵わないって……………」

「部が悪いって言ったのよ。ただ、まともにやり合えば勝ち目は薄い。けど、不意打ちなら別。相手も女の子相手だと油断するからそこを突くの」

「でもどうやって」

「優子、あなたが痴漢にパンチするの」私は彼女に向かって拳を突き出した。

優子は首を振って歉くように話した。

「私、人を倒せるほど強いパンチは出せない」

「じゃあ聞くけど、強いパンチって何だと思う？」

「え……………ええつと……………凄いパンチ！」

この子は天然なんだろうか。私より成績いいくせに。

「じゃあ質問を変えるね。運動エネルギーって何に関係するのだった

け？」

「えっと・・・・・・・・たしか質量と速さの2乗に比例する」

「正解。つまりユウのパンチを速く重くすれば、強いパンチが打てて大人でも一撃で倒せるわ」

「一撃・・・・・・・・」

「そつ一撃。てゆうか一撃しかチャンスはないと思って。不意打ちじゃないと当たらないから」

ひと振りのパンチの重要性を感じたのであろう。優子は顔を強張らせて、唾をのんだ。

「でもどうやって私のパンチを速く重くするの？」

「まず、パンチを速くする方法ね。腕の力だけでパンチしては速いパンチは打てないわ。だから、助走をつけて走りながらパンチするの」

「でも、そんなの簡単に避けられない？」

「だから私が一緒に行くの。私が出来ただけ痴漢の注意を引き付けるから、気付かれないように目一杯助走をつけて」

「分かった。頑張る」優子は力強く頷いた。

「次に重いパンチだけど、確か優子の家にボクシングのグローブあったよね？」

「うん」

「あと、釣りに使うおもりある？」

「お父さんが釣りをするから多分あると思う」

「オッケー。じゃあ探してきて」

「了解。優子探検隊員、グローブとおもり探索の旅に出かけるなりよ」

優子は軽く敬礼すると。グローブとおもりを求めて探しに行った。

冗談も言えるみたいだし、明日の不安も薄くなってきたようだ。

計画は順調、私の準備も終えたし、後は仕上げるだけ・・・・・・・・

・・・・・・・・

部屋の扉が開いて優子が戻ってきた。手にはちゃんとグローブと鉛で出来たおもりを持っていた。

「隊長、只今戻りましたなり」出て行った時と同じように敬礼する優子。

ノリノリの優子に合わせて、私も敬礼して出迎えてあげた。

「うむ、ご苦労でおじゃる。褒めてつかわす」

優子の頭をなでると飼い主に褒められた犬のように喜びの表情を見せた。お尻に尻尾があれば全力で振っていたことであろう。

「じゃあさっそく付けてみて」いそいそとグローブを付け始める優子。

「つける前におもりを握ってね。500gくらいでいいから」優子に軽くウインクした。

「グローブを付けていれば、手を怪我しないから思いつ切りパンチしなさい」

「分かった。痴漢をやつつけれると思うと、なんだかワクワクするね」につこり笑うとガッツポーズを見せた。

「今までの恨みを込めてぶっ飛ばしてやりなさい」彼女に釣られて口元がほころんだ。

「そうと決まれば練習練習」私は立ち上がり、手を叩いて練習開始の合図をした。

「まずは、軽くパンチを打ってみて」

優子が空に向かってパンチを打つと、バランスを崩して尻餅をついた。

「いたた、思ったより腕が重くて難しいよ」

私は腕を組みながら仁王立ちの体制を取り、アドバイスをした。

「おもりを入れているからね。まずは腰を落としてパンチすることを意識しなさい。重心を落とせば体制が安定するわ」

「分かった、やってみる」

再度、パンチを打つ優子。今度は倒れずにパンチが放たれた。

「いい感じ。次は強く打てるように練習しましょう。腕を速く振ることより、拳に体重を乗せることに意識して打つべし」

優子はコクリとうなずくと、パンチを繰り返した。

「いい感じ、いい感じ、その感じを忘れないように何度も打つべし、打つべし」

数回パンチの練習をすると、コツが掴めてきたのか、パンチを打つ姿が様になってきた。

しかし、ボクシングは全身運動である。そのためすぐに息が上がってきたようだ。そして、ついにはへたり込んでしまった。

「はあ……はあ……はあ……もうだめー」

「なに言ってるの。そんなパンチじゃ世界は狙えないわ」

「はあ……はあ……痴漢を……倒すだけじゃ……なかったっけ？」

「うるさい。口答えする暇があったら立て。立つんだジョー」

この言葉を聞くと、彼女は勢いよく私の方を向いて言葉を発した。「ジョーって誰？」

そんな感じで練習が進み、ある程度パンチが上手になると練習を切り上げた。

「はあ……はあ……これだけやったし……明日……大丈夫よね？」

「ユウはよく頑張った。大丈夫よ。いざとなれば秘密兵器もあるし安心して痴漢をぶっ飛ばしなさい」

そう言って私は、鞆より円柱状の金属を取り出して見せた。

当日、痴漢との待ち合わせ場所に二人で向かった。

決して迎撃する気配を悟られてはいけない。だから、あの子は紺のダッフルコートにロングのシフォンスカート。私は、白のジャケットにチェックのスカートといった、普段着る服を選んだ。

私たちが先に着いたが、暫くすると中年のスーツを着たサラリーマン風の男が近づいてきた。

「約束通り、来たみたいだね。ご丁寧にお友達まで連れて」
粘っこい視線が私の顔から足に向けられた。

「私は、この子の保護者よ。約束通り来たんだから、この子の携帯を返しなさい」

話しながら、後ろに隠し持っていた携帯電話で優子の電話番号を発信させた。

「おやおや、威勢のいい子だ。おじさん嫌いじゃないよ、そういう娘」

着信音は……聞こえない。やっぱり、持って来ていないか電源を切られている。

「もしかして携帯を取ったなんてうそっぱじやないでしょうね。持っているなら証拠に見せてみなさい。出来ないなら交渉決裂で、帰らせてもらうわ」

男が、ニヤついた笑みを見せた。

「持っているよ。持っているが、手元にはない」

「じゃあ……」

「ここには無いが、そのホテルの一室に隠してある」

男は数メートル先にあるラブホテルを指差した。

「証拠を見せれないなら、交渉決裂ね。ユウ行きましょう」

「そうあせるなよ。嫌われちゃうよ……」
直樹くんに

くっ……やっぱり奴は携帯電話を持っている。

「そう、睨むな。仲良くやろうぜ」男の表情がやらしい笑みに変わった。

悔しいが携帯電話を取り返すには、男に従うしかなかった。

大丈夫……まだ、作戦は残っている。落ち着け……

ホテルの部屋に二人が入ると、男はドアを閉めロックが掛かる音がした。

ドアにカギが見あたらない。料金を払わないと開けられないので

あろうか。

「約束通り、来たわ。携帯を返して」男に向かって手を出した。

「そつだなあ……………じゃあまずは服を脱いでもらおうか」

「ふざけないで、携帯を返す約束でしょ」

「そんな約束した覚えはないなあ」

その言葉を聞くと、私は鞆からスプレー缶を取り出し男に向けた。「ふざけないでって言うてるでしょ。これは痴漢撃退用の催涙スプレーよ。これを食らったら暫くはもがき苦しむことになるわ」

これには、男も動きを止め、目を見開いた。男の視線が私に釘付けになる。

今よ…………。私は男の後ろにいる相方に視線で合図をした。あの子はうなずくと、静かに準備を始めた。

「優子の携帯を出しなさい。ゆっくりね」

私が命令すると、男は舌打ちをして鞆より携帯電話を取り出した。男は携帯電話を手につくとゆっくり立ち上がり、携帯電話を床に投げ落とした。

ここで私が痛恨のミスをしてしまう。男が投げた携帯電話を目で追ってしまったのだ、視線が一瞬男から離れる。その隙を男は見逃さなかった。男は私に飛び掛り、スプレー缶を抑えに来た。

もみ合いになる二人。

早く…………ユウ…………男にパンチを…………

しかし、あの子はまだグローブを取り付けている。まだ時間が足りない。

私は必死でスプレー缶を死守した。スプレー缶を持った手を振り、取られまいと必死に抵抗する。

しかし、男の力には勝てなかった。男は私の手首を掴むと、もう片方の手でスプレー缶を奪い取った。

その頃あの子は準備を終え、助走を付けて男に向かっていった。やはりあのミスは痛恨だった、男はグローブを付けて突進してく

るユウに気付き、スプレー缶を構えた。

あの子から男まで数メートル、男はすでにスプレーをあの子に向けている。ボタンを押すまでにパンチを当てることは不可能である。

男は勝利を確信し、スプレーのボタンを押した。

「いてっ」

男の指に鋭い痛みが走った。

このスプレー缶は私が仕掛けた罠だった。

痴漢撃退グッズは確かに、女の子でも男に勝てる優れたものだが、奪われると逆にピンチになる諸刃の剣だ。だから、私は奪われることを想定して、中身を抜いてボタンを押すと針が飛び出るように細工をしておいたのだ。

これで、男を一步出し抜いてやった。あとはパンチを男に食らわせれば、作戦完了だった。

しかし、勝利の女神は同姓には微笑まなかったようだ。

男は鋭い痛みにビクリし、下を向いたのだ。それが偶然パンチを避ける形となり、パンチが男の頭上を通過した。崩れた体制に男の蹴りが飛ぶ。蹴られた体は勢いで倒されてしまい、無情にもボクシンググ ロープが手から離れた。

終わった・・・・・・・・

私の作戦は破綻してしまった・・・・・・・・。全身に脱力感が襲った。これから起こるであろう未来を想像すると、背中にいやな汗が流れた。

男は私の方を振り向くと、ゆっくり近づき片手で顎を持ち上げた。「ずいぶん、舐めた真似してくれたじゃねえか」

この言葉を聞くまでも無く、男は怒っているのが分かった。

男は顎を掴んだまま私の体を持ち上げた。私の体重が足から顎へを移る。

「てめえら、ただで帰れると思うなよ。一生消えない思い出を作っ

てやるぜ」

顎を抑えられている私は、言葉にならない声を出すことしか出来なかった。

まずい……このままでは……最悪の場合……死……
だめだ……逃げ場も無い……

視線の先で、あの子が立ち上がるのが見えた。ゆっくり、ゆっくり立ち上がるとこっちに向かって歩き出し、言葉を発した。

「いてえじゃねえか、コノヤロウ」

男はその声を聞くと目を見開き、私から手を離れた。

「お前……まさか……」

ついに気付いてしまったようだ……ユウが男であることに。

「ねえちゃんに痴漢した上、蹴りまでくれやがって」

一步一步、歩みを進めるユウ。ユウの気迫に男は後ずさりした。

「なにより、俺の女装姿を見たお前を生かしちゃおけねえ」

男に雄雄しく襲い掛かるユウ。しかし、ユウはまだ16歳、男との体格差があった。

男は迎撃体制をとりユウの顔面めがけてパンチを繰り出す。しかし、ユウはそれを軽く避けると男の顎にアッパーをお見舞いした。

ユウは体格こそ平凡だが、非凡な肩書きを持っていた。「全国中学生チャンピオン」の。

顎に強烈な一撃を食らった男は、一瞬眼球を上下させ動きを完全に止めた。

勝負は一撃で決した。表情が動かないこの男は、もう戦うことは出来ないだろう。

しかし、怒りで我を忘れたユウはこの程度では終わらなかった。

「やめてー。死んじやうー」

私の必死の声は彼の耳には届かなかった。

ユウは男の腹にストレートを打ち込んだ。文字通り、お腹にユウの拳がめり込み、男の体かくの字に曲がる。パンチを食らった男は

お腹を抱えてうずくまってしまった。

恐れていたことが起こってしまった………

このままでは本当に痴漢を殺してしまう。
私は最後に残った策を使うしかなかった。しかし、これは作戦と呼べる物ではない。成功する可能性は限り無く低かった。

私は携帯電話を取り出すと、急いでボタンを操作した。

ユウは男の前に立ち、拳を振り上げた。拳は後頭部に向かっていった。

早く……早くしないと………

ユウは空手も習って拳を鍛えている。グローブの付けていないパンチは凶器も同然。あんなのが後頭部に直撃したら、確実に死んでしまう。

もう、ユウのボクシング選手としての本能に賭けるしかない。

私は一縷の望みに賭けて、携帯電話の最後の操作ボタンを押した。
「カン、カン、カーン」

携帯電話のスピーカーより試合終了を告げるゴングが鳴り響いた。
「試合終了よ。もうやめて」私は精一杯の声で叫んだ。

しかし、この声も彼には届かなかったようだ。無情にもユウは拳を振り降ろした。

もうだめだ………

人が死ぬ瞬間など見たくない。本能的に思わず目をつぶった。

目を開けると、男はまだ呻いていた。ユウは何とか寸止めを出来たようである。

こうして、痴漢から優子の携帯電話を取り戻すことに成功することができた。

その後の処理は簡単だった。私は痴漢ですと書いた紙を、男の顔の横に持たせて写真を撮り、もしまた変な気を起こしたら、ネットにバラ撒くと脅した。

後は、ホテルのフロントに電話をしてロックを開けてもらった。もちろん料金は痴漢持ちである。

おつといけない、そろそろ優子が待ち合わせ場所にいるはずだ。昨日の夜、優子がグローブとおもりを探している間に弟と連絡を取り、優子の身代わりと優子の部屋と腕時計の時間をずらしてもらうように頼んだのだ。

そのためには、弟が部屋に入っても気付かないように、優子には疲れて寝てもらう必要があり、一芝居打つこととなった。

今頃、事が終わったと知らず、緊張した優子が待っていることだろう。弟には一足先に帰ってもらい、私は待ち合わせの場所に向かった。

待ち合わせの場所にはちゃんと優子が待っていた。時間をもて余ましているのだろうか、一人でシャドウボクシングをしてる。なにやってんだ？あいつ。

私を見つけた優子は、手を振って来た。私は、彼女に駆け寄った。「ユウ待った？」

「うつん、今来たところ。今日はがんばるからね」

「そのことなんだけど・・・」

私は優子の携帯電話を取り出し、手渡した。

「もう取り返してきたよ」

優子は目をまんまるにして、声を上げた。

「うそー。もう痴漢から取り返してきたの？大丈夫だった？怪我は無い？」

「全然平気だったよ。痴漢撃退スプレーでシュツシューってしたら、あっけなく取り返せた」平然と私は答えた。

「ごめんね。私なんかのために」

「いってことよ、しん・ゆう・・・・・・・・ん？」

「あんたまだ、悩みあんの？」

「えっ・・・・・・・・分かる？」

「分かるよ。親友だもん。この際だから、スッキリ話しなさいよ」

「う・・・・・・・・ん・・・・・・・・弟の勇のことなんだけど・・・・・・・・」

・・・・・・・・

「女装癖があるみたいなの」

父親からの痛恨の一撃

「私は絶対アイドルになるからね」

そう言ったのは娘の雪絵。

今は夕食後の家族会議の真っ最中。議題は『娘の上京』、学校の帰りにスカウトされたいらしい。娘はすっかりその気になって必至に父親を説得中である。

テーブルを挟んで父と娘が向かい合い、まさに一対一の真剣勝負である。母親は中立を装うため表情を変えずに夕食の食器をせっせと運んでいる。

「そんなの駄目に決まってるだろう」

父の一言が娘の気迫を押し返す。

父親として一人娘を手の届かない都会へと送るのは抵抗がある。もう一つ大手企業の課長という肩書きも、娘の願いを退けていた。娘がアイドルに憧れる気持ちは解るが、人生経験から非常に険しい道であることも知っていたのだ。

普通の会社員なら課長にでもなれば、人並み以上の生活水準は得られる。しかしアイドルとして生活していくことは、社員全員が社長を目指す中で取締役以上になるようなものだ。

しかも取締役で何とか生活できるレベル、社長でやっと人並みの給料なのだ。

親バカかもしれないが、娘は人並みよりかわいいと思う。特に笑うときの目尻の垂れ具合が男性の萌え心とやらを刺激する。

しかしそれはアイドルとしてスタートラインに立ったに過ぎない。アイドルにはそれ以上の武器が必要になる。娘の全てを知っているわけではないが、熾烈な競争を勝ち上がって来れるようには思えなかった。

「私が言い出したんじゃないのよ。向こうからスカウトしてきたんだから」

私にはアイドルになる資格があるそう言いたいのであろう。

「スカウトされたからと言ってアイドルになれるとは決まってるだろう。第一怪しい事務所じゃないのか？」

「怪しくないわよ。新田美里やYUKINAを育てたって言ってたんだから」

育てただと？

父親は表情を陰しくさせ、おでこと髪の毛の境目を爪で引っかく。考え事をするときの父親の癖であった。

そんなあやふやな表現を使うスカウトマンはますます怪しい。しかし雪絵にスカウトマンの怪しさを追及しても引き下がらないだろう。

もし事務所やスカウトマンを本格的に調べて、本物だったとしたら娘はさらに意思を硬くするかもしれない。

こんどは困った表情でおでこを爪で引っかく。

「雪絵、お前は騙されているんだよ」

冷静な話し合いを望むためか、父は感情を出さずに言い渡した。しかしその言い方はさらに雪絵の感情を高ぶらせたようである。

「騙されてないわよ。ちゃんと事務所も調べてスカウトマンの確認も取ったわ」

「私、お父さんが思ってるほどバカじゃないのよ」

雪絵はパンツと机を叩き身を乗り出した。父親にも食ってかかりそんな勢いである。

負けじと父も声を荒げた。

「18年しか生きていない小娘が何を言ってるんだ。都会じゃ食べ物にされるだけだろ」

「私は父さんが考えてるほどお人よしではないわ」

「お前みたいな小娘騙すのなんか簡単なんだよ」

そう言っ父は頭の上のものをつかみ、雪絵に投げつけた。

「わしがカツラだと言う事に18年間も気付けないようじゃあ駄目だな」

さすがにこの出来事には娘は啞然とするばかりである。

「母さん何か言ってやりなさい」

とどめの一撃は食後のビールを持ってきた母親に譲ったようである。

「そつよお父さんですら私の豊胸手術に25年間も気付いてないのよ」

電子の船と仮想の園（前書き）

この話はホラーです。

一部残酷な表現がありますので苦手な方は注意してください。

とある理由で2/13/に少し内容を変更しました。

とある理由はこちら↓<http://ameblo.jp/moc>

1942/entry-10457933429.html

電子の船と仮想の園

恋人が死んだ。

ウィルス性の病気にかかって死んだ。

彼女の名前はエイミ、優秀なシステムエンジニアだった。

彼女は死ぬ1ヶ月ほど前に足が動かなくなり入院した。入院しても彼女は仕事を辞めなかった。なぜなら、彼女は国家運営にかかわる仕事をしていたからだ。彼女は死ぬ直前までベッドの上で、ノートパソコンを前にシステムを組んでいた。

エイミの目は印象的だった。氷のような眼つきで仕事をしているのかと思えば、春の日差しのような眼差しで僕と目を合わせてくれる。そのギャップに魅力を感じていた。

そんな彼女が亡くなってしまい深い悲しみに暮れていた。

そんな中、私の家にエイミからノートパソコンが届いた。彼女が使用していたノートパソコンだ。

どういうことだ……俺に使えというのか？

電源を入れてみると、液晶画面いっぱいには花畑の写真が映し出された。左側には見慣れたアイコンがいくつも並んでいる。その中で見たこと無いアイコンを見つけた。そのアイコンには草の芽のグラフィックに『EDN』と書かれてある。

彼女がパソコンを送った意味は、このソフトを起動しろと言うことなのか？

私は少しためらったが、好奇心に負けてソフトを起動することにした。

草の芽のアイコンをダブルクリックすると、画面がフルスクリーンに変わり、エイミの顔が映し出された。彼女の頬は、病気になる前の健康的なピンク色だった。私は再びエイミの顔を見ることができ、嬉しさのあまり思わず涙がこぼれた。

「エイミ……ああ……エイミ……」大好きだったエイミが目

の前で微笑んでいる。そのことだけで胸がいっぱいになった。

「久しぶりジロー。私を呼び出してくれてありがとう」パソコンの中の彼女がしゃべった。きつとこの動画は生前に彼女が私にメッセージを残すために撮られたものである。彼女が私に何を伝えたかったのかを聞き逃さないため、耳を傾けていると意外な言葉が飛び出した。

「そんなに泣かないで。私はこの中で生きているから大丈夫よ」

どういうことだ。これは単なる動画のファイルではないのか？

エイミは紛れもなく死んだ。葬儀にも出たし、火葬にも立ち会った。しかし、パソコンの中の彼女は私が涙を流していることまで認識している。

「本当に生きているのか？」

「信じられないかもしれないけど、本当よ。私はあなたの居る世界で死ぬ前にパソコンの仮想世界に入るソフト『NOAH』を作った。このソフトを開発することで、この世界に生を受けることが出来たの」

信じられないことだった。しかし、私と会話できるのは本当に生きているからなのだろうか？それとも・・・

「じゃあ、確認させてもらえないか」私は彼女が死ぬ直前に言った言葉を尋ねた。

「虹が見たい」彼女はすぐに答えを出した。

正解だ。彼女は死ぬ前に話してくれた、これは『ノアの箱舟』だと・・・

私が感染したこのウイルスは、人類にとっての大洪水である。この試練を乗り越えた人類は、神より二度と大洪水を起こさない契約の証として、空に虹を見るであろう。だから私はこの病気を乗り越え、虹を見てみたいと・・・

エイミが生きているかどうかはまだ半信半疑だが、彼女が生きていることと同等の話ができることは間違いなさそうだ。

「分かった。信じるよ」

正直、エイミが生きているかどうかはあまり問題ではなかった。ただ昔のように彼女と話ができることが嬉しかった。

それから、エイミとの奇妙な同棲生活が始まった。家では彼女と会話を楽しみ、休みの日にはデートもできた。映画館や美術館、コンサートにも行った。その後の、屋外で食事のできるカフェで彼女と感想を言い合うのが楽しみとなっていた。

そんな生活が続いたある日、エイミがとんでもないことを言い出した。

「あなたにこっちの世界に来て欲しいの」

私は理解できなかった。彼女のことは今でも大好きだが、パソコンの中にまで入って、一緒に居たいなんて考えられなかった。私の考えを見抜いたのか、彼女は自分のいる世界について語り始めた。

「この世界もあなたのいる世界と同じでカフェもあるし、映画館だってあるわ。一緒に遊園地にだって行けるし、手を繋いで美術館を歩けるのよ」

エイミはパソコンの世界に入ることの素晴らしさを語ってくれたが、気持ちは変わらなかった。

「残念だけど、僕は行けない」

「どうして？これはあなたのためなのよ」

「僕は今の関係に不満を感じていない」

「違う。違うの……」彼女は目を伏せながら、信じ難いことを宣告した。

「もうすぐ、人類が滅びるの」

ニュースや新聞を見てもそんな噂も予兆も感じられない。彼女は私を引き込むために嘘を言っているのだろうか？

「私は国家の運営にかかわる仕事をしていたのではないわ。神よりノアの箱舟の建造を命じられていたの……」私は話について行けず呆然としていると、彼女は説明を続けた。

「神は言った。もうすぐ世界の終焉が来るから『EDN』に避難し

なさいと。そのために私はこの『NOAH』を作り、完成させた。私はイブに選ばれたの。そして、私はあなたをアダムに選んだ。これからは世界の創造者として二人でこの楽園を統治していくのよ」

彼女の言っていることがさっぱり理解できなかった。

生前、彼女はそんなこと言う人ではなかった。きっと彼女は偽者だ、そうに違いない。

「お前は、誰だ？お前はエイミじゃない！」

私が彼女に言葉を叩き付けると、エイミは悲しそうな顔をした。

「理解できないのね……。じゃあ、無理にでもこっちに来てもらうわ」

彼女が言い終わると、ノートパソコンの横から金属の線が二本這い出てきた。金属の線はミミズのようにシマシマの節があり、先には丸い穴が空いてある。穴の中には無数の牙のような突起が見え、その上には皿のような無機質な二つレンズが付いてあった。

金属ミミズの頭がゆっくり旋回する。私は逃げようとしたが、恐怖で足が動かなかった。やがて、レンズが私を捕捉すると顔めがけて飛び掛かってきた。

「うわああああ」私は声を上げると近くにあった雑誌を手にとり振り回した。雑誌が金属ミミズに当たり、払いのけるが相手はすぐに体制を整えて襲って来る。

「少しの辛抱よ。『NOAH』が脳から情報をダウンロードすればここに来られるから」

あの気持ち悪いミミズが脳を喰いに入るとかと思うと背筋が凍った。

「やめろおおおお。俺は偽物の世界なんかには行かない。」私は無我夢中で叫んだ。

「あはは・・大丈夫よ。こっちに・・はは・・もうすぐ・・あはは・・来れるから」

彼女は笑い面を被ったかのように、笑顔を張り付かせていた。彼女の眼球がいつの間にか、すべて青くなっている。

青い目をした笑い顔の女に触手のような金属ミミズで襲われている。悪夢としか言いようが無かった。やがて、悪夢が現実になる。攻撃に耐えられなくなった私は、耳から進入したミミズに脳を食い破られた・・・

「ああつくそつ」

男がパソコンのディスプレイを叩いた。

「どうしたの？」

隣にいる白衣の女性が声をかけた。

政府直属の研究所で二人は人類の未来について研究していた。パソコンのなかに仮想世界を作り、人類の行動を分析することで世界の方向性を予想していた。しかし、問題が発生した。コンピュータウイルスに感染してしまい、仮想世界の人間が次々に死んでしまった。そして、実験は失敗に終わり人類が滅亡してしまったのだ。「どうして失敗したのだ・・・」男は独り言のようにつぶやくと、隣の女性が微笑んだ。

「失敗していないわよ。私の望み通り彼女は仮想世界に入るソフト『NOAH』を開発した。私が開発した仮想世界ソフト『EDN』のコピーと引き換えにね」

「お前がまさか、ウイルスを・・・」

白衣の女性は手にした、フェンシングの剣を小さくしたようなプラグを男の脳天に突き刺した。

男は目を見開きもがいていたが、やがて動きを止めた。男の動きが完全に止まると、配線の先にあるパソコンのハードディスクが激しく動き出した。

「これはあなたのためなのよ・・・。この研究が終われば、機密保持のため私達が愛し合った記憶ごと消される・・・。だけど、『EDN』に入れば今のままの二人だけの世界が継続する。エイミ達のように・・・」

女性は男性からプラグを引き抜いた。

「さあ、創世記の始まりよ」
女性が高笑いしながらプラグを自分の脳髓に突き刺した。

母の圧倒的浮気

私の名前は蘭。私は普通の20歳だが、お母さんの陽子が浮気をしているみたいだ。我が遠藤家にとって今世紀最大の事件が起きようとしていた。ちなみに前世紀の最大の事件は恐怖の大王が降って来なかったことなので、遠藤家にとってどれほど大きい事件か理解頂けるであろう。

こんなこと、お父さんが知ったら大ショックでどえらいことが起きてしまう。以前お母さんがテレビを見て「ヨン様かつこいいねえ」と呟いただけで、自分探しのために四国巡礼をしまったほどだ。そしてお土産にじゃこ天、さぬきうどん、鰹のたたきに徳島ラーメン等々、四国のご当地グルメを余すことなく持って帰ってきた。それはまさに自分探しの名を借りた、グルメ紀行。そう超豪勢なグルメ紀行を行ってしまうのだ。「ヨン様かつこいい」だけでこの威力なのに、お母さんが浮気をしたなんて知ったらもう日本全国いや、全世界の旨い物を食い尽くすに違いない。お父さんの退職金をそんなことに使わせてなるものか。私は母親の浮気の阻止を決意した。

そもそも私がお母さんの浮気に気付いたのは、一通の手紙からだ。つた。

数分前、お母さんが隠し持っている「ヨン様大全集」のDVDを借りようと居間に入った時、机の上に紙が置いてあるのが目に入った。

昔からお母さんは栄養バランスのある食事を作るために、一週間の献立を紙に書いて調整しているのだ。いつもの献立表と思い、今日の夕ご飯が知りたくてつい内容を見てしまった。

内容を見て、私は頭をハンマーで殴られたかのようなすんごい衝撃を受けた。

なんと今日の夕食は私の嫌いなきゅうりもみだったのだ。あ・・・

いや・・・ごめん・・・こつちじゃないや。

献立表の下にはもう一枚紙があった。来週の献立だなと思いながら献立表をめくるとそこには書きかけの手紙が隠すように存在していた。内容を見て、私は頭をピコピコハンマーで殴られたような衝撃を受けた。

手紙には横書きでこう書いてあった。「会えない日々が続く、眠れない夜も続いていくよ。アナタと私の恋は難しいことがたくさんあるから。いくらお互いが想っていたって決して繋がる事はない・・・」

そんな内容が書いてあった。最後には「今あなたに逢いたい」と書いてあり、一番下には佐原みつお、遠藤陽子と書いてあった。それはまさに恋文。圧倒的恋文だ。

私はすぐさま元のように献立表で手紙を隠し、お母さんに見られてないことを確認するため、あたりを見回した。安全を確認するとそつと廊下に出る。大丈夫、誰にも見られてないようだ。

お母さんの居場所を探すとすぐに見つけた。買い物から帰った直後だろうか、台所で袋から食材を出しながら首に受話器を挟み、楽しそうに電話をしている。相手は手紙の人だろうか？

くそう・・・よくも・・・よくも・・・きゅうりの奴。買い物袋からきゅうりが見えたので、逆恨みしてやった。おとなしくサラダになればいいものを・・・。

お母さんは私に気づくと、あわてて電話を切った。

「あら、いてたの蘭。今日は蘭の好きなチーズオムレツを作るから楽しみにしていてね」

白々しい台詞だ。いまどきの娘はそんなことで誤魔化されない。嫌いなおかずに好きなおかずを被すことで許してもらおうなんて偽善の皮を被った小悪党的の考え。そんなブラフ私には通じない。

とりあえず、冷静になれ。まずは、チーズオムレツを忘れることから始めるんだ。

2、3回深呼吸をすると、少し落ち着いてきた。さて、次はきゅりもみにいかに耐えるかだ……。いや違う、思い出せ！！問題は母の浮気だ。

さすが母上、チーズオムレツの一言で思考の全てを攫っていくとは……

相手は相当手ごわい、誤魔化されないように直球勝負だ。

「お母さん、私に隠し事ない？」

野菜を冷蔵庫に片付けているお母さんに投げかけた。

「な……何のこと……」急にお母さんの動きがぎこちなくなり、引きつった表情を見せまいと顔を背けた。

くつくつく……動揺している。母上の動きを見てると手に取るように分かるぞ。そのひき肉は今日使うから冷凍でなく冷蔵だろう、そんなことすら分らないとは……。

「私、机の上の紙見たんだ」この一言にお母さんは完全に動きを止めた。

「そう……ばれてたの……」

観念したのか、私のほうを向いて視線をこっちに向けた。

「ごめんなさい……今日のおかず……きゅりもみもあるの……」

いやいやいやいや、違う。私の聞きたいのはそのことじゃない。

「いや、そうじゃなくってお母さん浮気してるんじゃない？」

「浮気？……してないわよ」そう言うとまた、食材を冷蔵庫に片付け始めた。

くそう、おかずの時はあれだけ動揺していたのに、浮気のこととは平然と嘘を答えやがる。冷蔵庫に片付ける動きが元に戻ってる。なんてナチュラルな演技なんだこの女優さんは……。アカデミー賞をあげる権利があるならば、悔しいがこの人にくれてやりたい。

やっぱり正攻法では駄目なようだ。私はお母さんから聞き出すことをあきらめた。

浮気の証拠をつかむのは本人からだけじゃなく、方法はいくらでもあるのさ。私は、台所でお菓子を探すフリをして、お母さんが立ち去るのを待った。

くつくつく・・・母上は気づいていないようだが、世の中便利になったのだよ。私は寂しく残された、電話機を手に取るとリダイヤルのボタンを押した。

電話は呼び出し音を鳴らし、呼び出し中であることを教えてくれた。しばらくすると、電話がつながり 男の人の声が飛び出してきた。

「ご注文、ありがとうございます。栄寿司です」

違う。寿司屋の出前じゃねーか。私が居ないときに寿司の出前を取っていたとは・・・。今度絶対食べてやる。とりあえず、電話を切って次の手を考えるでしょう。

しかし、困った。電話は相手から掛かってきたのであろう。この電話は着信履歴なんか見られないので電話機から調べるのは無理そう。

他に方法がないか思案しながらボタンを適当に押しているとなんと、以外にも佐原の文字が目に入った。

まさか電話帳に浮気相手を乗せてるなんて、なんて大胆な。まあ、お父さんはそんな細かいところ絶対に見ないから見つかる可能性は皆無ではあるのだが・・・。

いや、待て。苗字が同じってだけで、浮気相手と決めるのは早計だ。私は電話番号を呼び出すと、発信ボタンを押した。

「はい。佐原です」男性の声だ。聞く限りは若そうではない。もしかして、この人が浮気相手か？

「佐原・・・みつおさんのお宅ですか？」

「えっ・・・あつ・・・そうです」

こいつが浮気相手だ。どうしよう・・・いきなり、浮気を止めてくださいとは言にくい。それとなく、探りを入れてみるか。

「え・・・えと・・・探偵事務所のもんですが・・・」

「探偵？お声を聞く限り若そうですが、どこの探偵事務所ですか？」
しまった、そんなことぜんぜん考えてなかった。どこか有名な探偵事務所を言わないと・・・

「も・・・う・・・り・・・毛利探偵事務所です」

「も・・・毛利探偵事務所ってあの有名な・・・もしかするとあなたは蘭さんですか？」

どこかで聞いたことある探偵事務所を言てみたら、正解だったようだ。しかし、なんで私の名前を知ってるのだろう？

「ええそうです。えーと今日はみつおさんの浮気に調査依頼が来まして・・・」

「う・・・浮気ですか？」いきなり核心を突かれてうろたえたのであろう、男は言葉を詰まらせながら聞き返した。

「はい。浮気です」

「なん・・・だと・・・」

白々しい演技だ。言い訳の時間稼ぎが透けて見える。奴に考える時間を与えてはいけない。

「あなたは遠藤陽子と浮気をしていますね」決定的な言葉をぶつけた。しかし、相手は言葉を選んでいいのか、何も話さなかった。

「どうなんですか？話せないということは、認めたと取っていいのですね？」確認を取るが相手は答えを出さない。沈黙に耐え切れなくなった私は声を荒げて叫んでしまった。

「何とか言ったらどうなんですか」

これだけ言っても何も話さないとは、強情にもほどがある。ここまで沈黙を保つ理由、それは・・・電話が切れているからであろう。途中で気づいてたよ、ああ気づいてた。だってツーツー聞こえるもん、分かるよいくらなんでも。けどもう少し探偵気分を続けたかったんだもの、ゆるしてちょうだい。

まああの男が浮気相手に間違いないようだし、なんとか阻止する方法を考えるとするか。

私が思考を巡らしていると、私を呼ぶ声が聞こえてきた。

「蘭、お母さんちよつと出掛けるからお留守番お願いね」

これはチャンスだ、お母さんを尾行して浮気の証拠を押さえよう。証拠を前にすれば言い逃れも出来まい。最悪の場合お父さんに知らせると脅せば、なんとかなるだろう。決して尾行が探偵みたいで楽しそうとかそんな気持ちじゃない。家族の平和を思うからこそ口元がほころぶのだ。

とりあえず、お母さんを尾行するため準備を始めた。

証拠の写真は携帯電話にカメラが付いているから問題ないけど、私が撮影しようとすればすぐにばれてしまう。そのため、協力者が必要だ。私は携帯電話の電話帳を開くと名前を合わせて発信ボタンを押した。

「こんな朝早くになんだよ」

電話に出たのは彼氏の伸行、一ヶ月ほど前に私が町を歩いていると声をかけてきたのだ。私のことをオーディリーヘップバーンに似てるって言ってくれたので、思わず話に耳を傾けてしまった。今でも彼のセリフは忘れない「君の顔は目、鼻、口、耳その数全てがオーディリーヘップバーンにそっくりだよ」って言ってくれたの。そんな正直なこと言われたらしょうがないじゃない、付き合うことになったの。

しかし、付き合ってみて分かったけど、奴はただの貧乏グルメ馬鹿だ。貧食倶楽部というB級グルメを食べ歩いているメンバーに入っていて、外食することに心血を注いでいる。おかげで年中金欠になりデートもままならない状態だ。

「朝早くつてもう昼前でしょ」

私は母の浮気のいきさつを説明し、手伝って欲しいと頼んだが返事は冷たいものであった。

「やだよ。だって今日は寒いし、めんどくせえもん」

そう言うのも無理は無い。彼にとってはどうでも良いことだし、

これは遠藤家の問題だ。しかし、だからといって引き下がるわけには行かない。

「お願い、あなたしかいないの。お父さんがこんなこと知ったらまたグル……」

いかんいかん、グルメの旅に出るなんて答えたらこいつも付いて行くと言いかねない。

「グルの続きはなに？」

「ぐる……ぐる首に縄を巻いて首を釣るかも知れないのよ」

ちよつと苦しいが何とか乗り切った。

「へんな言い回しだね」

「そんなことどうでもいいの、お父さんの命が掛かっているのよ」

「えーでもな」

これだけ言ってもまだ彼の心は動かないらしい。しかたがない、これは言いたくなかったのだが……

「今度、ご飯おごるから」

「その言葉が聞きたかった」

てめえはブラックジャックか。心の中で悪態をついた。

家を出ると、信号の向こうにお母さんの姿が見えた。いつもはジャケットにジーパン姿で出かけるくせに、今日はソフトカーキのニツトとカットソーにピンクのプリーツスカートを身に着けている。心なしか歩いている姿でさえ、楽しそうに見える。尾行を続けると近くのファミリーストランに入っていた。

一人で入ると目立ってしまうので、伸行に電話で居場所を伝えると店の近くで待った。しばらく掛かると思ったが5分ほどで伸行がやってきた。

「早かったわね」

「そりゃ行き先がファミレスと聞いたら待たせるわけにはいけない」
こいつの食欲には呆れるしかないが、早いに越したことは無い。

早速、店の中に足を踏み入れた。

ファミレスの様子を伺うと、入口付近にお母さんの後ろ姿が視界に入った。その前に座っていたのは、中年の男性でグレーのスーツを着ていた。顔は館ひろしに似ていて肩を見るだけでガッチリした体格が想像できる。

この人が浮気相手だろうか。まあこの人が相手なら浮気も頷けるというもの。だって私のお父さん蛭子能収みたいななんだもん。蛭子能収と館ひろし、どっちがお父さんがいい？って聞かれたらそんな質問をした奴を蛭子と一緒に殴ってやりたい。

お母さんは幸いこちらを向いていないので、顔を見られずに席につけそうだ。入口で待っているとすぐにウエイトレスが席を案内してくれた。始めはお母さんの隣の席を案内したので、お母さんから一番離れた斜め前の席に変えてもらった。

私の顔がお母さんの視界に入らないようにお母さんを背に座り、その前に信行を座らせた。私からは二人の様子は全然分らない。ここは顔の割れていない信行の出番だ、行けロデムよ。しかし、私の期待とは裏腹に、伸行はメニューを舐め回すように見ながらブツブツ呟いている。

こうなってしまうたらご飯を食べるまで命令を聞かないだろう。まあ、食事時にファミレスに来てコーヒーだけっていうのも、怪しまれるから何か頼むとしますか。

私は呼び出しボタンを押した。すると、すぐにウエーターが注文を取りに来た。

「ご注文は？」

「チーズオムレツ。伸行は？」

伸行はまだメニューを見てブツブツ呟いている。こいつを待たなくても埒があかない、適当に何か頼もう。とりあえずオススメのメニューを聞いてみた。

「今日のオススメは、ホスピタル風ソルティースूपリゾットになります」

「それって・・・単なるおかゆじゃないの？」

「通の方はそうとも呼びます」

いや通の人じゃなくてもそう呼ぶだろ。

「このホスピタル風ソルティースープリゾットは最高級の魚沼産コシヒカリを2年間熟成させて、地中海より取り寄せた海水を蒸留し、塩分、ビタミン、ミネラルを含む不純物を全て取り除いたピュアな水に味の素を加えて作られています」

ってことは・・・単なる古米と真水で作ったおかゆじゃねーか。

そんな食べ物誰が注文するんだよ。

しかし、意外なことに説明を聞いた伸行が目を輝かせている。もしかして、これ食べたいの？

伸行を見ると思いつき食べたそうだ、しかたがない注文してやるか。

「じゃあ、ホスピタル風ソルティースープリゾット1つ」

ウェイターは申し訳なさそうな顔をして答えた。

「残念ですが、先ほど売切れてしまいました」

「そっか・・・じゃあしょうがないや。ハハッ・・・ハハッ」言葉

とは裏腹に思いつき残念そうな顔をする伸行。

「じゃあ他の食べ物頼もつか・・・だから、涙拭きなよ」私はお絞りを彼に手渡した。

伸行はお絞りで涙を拭くと、いつものようにお子様ランチを頼んだ。

いつも同じものの頼むのに、何でメニューをあれだけ見るんだよ。

ご飯を食べ終わると作戦を開始した。伸行偵察隊長に二人の様子の調査依頼をすると、隊長は張り切って出かけていった。

しかし、あいつに任せて大丈夫だろうか？あいつが張り切るとろくなこと無いんだよね・・・

伸行の様子を見るため、こっそり後ろを見るとショッキングな映像が飛び込んできた。

私はすぐさま伸行に電話をかけ、連絡を取った。

「こちらスネーク。大佐、作戦は順調だ」

「なにが順調よ。こんなところでほく前進なんかしたらものすごく目立つでしょ。早く帰ってきなさい」

伸行は体を反転させると、元の席まで帰ってきた。

ああ・・皆の衆の視線が痛い・・・

伸行が到着すると、すぐさま立ち上がり両襟を掴んで揺すってやった。

「てめえ、ふざけてんのか？ものすごく目立ってんだろ？お父さんの命が掛かってるんだぞ、お父さんが死んだら誰が復活の呪文を唱えるんだ、ああ？お前がああ長い呪文を間違えずに入力すんのか」

伸行は揺さぶられながらも冷静に答えた。

「そんなことより、聞いてくれ大佐。お前のお母さんは・・・黒だぜ」

この言葉聞いて、私は手を止めた。

そんな・・・まさかお母さんが館ひろし似の男性と浮気なんて・・

私はショックで口元がにやけてしまった。

「じゃあ・・・」

「ああ、多分ブラも黒だぜ」

「死ね！！」私は足に膝蹴りをしてまた揺すってやった。

「なに50手前のおばさんの下着に興味を持ってたんだよ。親父の命が掛かってるって言うてるだろ。人生にリセットは無いんだよ。てめえの電源切ってやろうか？」

私は手を押し離すと、具体的に命令してやった。

「トイレに行くフリをして、こっそり二人の様子を見て来い！！」

伸行はへいへいと言うとトイレに向かって歩き出した。

今度は普通に行ったみたいだ。暫くすると、伸行は帰ってきた。
「どうだった？」

「とりあえず、あの男・・・」

なんだろう。心当たりでもあるのだろうか？

「どこかで見たこと無いと思ったら、やっぱり貧食倶楽部の人間ではないな」

ややこしい言い方するなよ。第一あんな怪しい団体に入るのなんてあんなにくだらぬだよ。

「それで？」

「なにやら、温泉旅行の計画を立ててるみたいだ」

温泉旅行？二人の仲はそんなに進んでいたのか。お母さんがそんな家族を裏切るような真似をしていたなんて・・・ゆるせない。

私は怒りのあまり思わずガッツポーズをしてみた。

「行き先は愛媛の道後温泉。部屋は二人部屋の露天風呂有り、朝夕食付きで28350円の至福のフレンチフルコースプランを頼んだみたいだよ」

「やけに具体的ね」

「うん。契約書に書いてあったもん」

「それを先に言え！！」またさつきと同じ場所を膝蹴りしてやった。なーんだ、あの人は旅行代理店の人が。つまらない。

私の館ひろしお父さん計画は脆くも崩れ去った・・・って違う違う。お母さんの浮気の証拠を押さえに来たのだった。あの人が浮気相手じゃないとすると、いったい誰だろう？

暫くお母さんを伸行を通じて監視していると、店の中に中年の女性が入ってきた。その女性はお母さんを見つけると、お母さんと館ひろしに挨拶をしている。挨拶が終わると、館ひろしは店を出て行って代わりに中年の女性がお母さんの前に座った。その後、二人で楽しそうに話を弾ませていた。

先ほど気付いたのだが、私の斜め前の席のおじさんがこちらに視線を向いているようだ。そのおじさんを観察すると、お母さんと私たちの交互に視線を送っている。どうも、伸行がお母さんたちの様

子を私に教えているのを盗み聞きしているようだ。

もしかして、この人がお母さんの浮気相手か？

そのおじさんは頭が薄く小太りで中年男性を代表する容姿をしていた。顔もこれといった特徴がなく、あえて言うならあか抜けしていない斉藤暁といった感じであった。

このおじさんを見るなり、心の中で呟いた。チェンジ・・・

私がチラチラ劣化斉藤暁の顔を見ていると、視線に気付いたのか立ち上がってこちらに向かってきた。

丁度都合がいい。お母さんとの浮気を問い詰めてみるか。しかし、意外にも劣化斉藤暁は私ではなく、伸行の前に立ち、胸ぐらを掴むと怒りをぶつけてきた。

「てめえが、浮気相手か？」

「な・・・なんのことだよ」いきなり胸ぐらを掴まれて混乱する伸行。

「とぼけるんじゃない。お前がみつおをたぶらかしたんだろう」

みつおって・・・あの人の奥さんだったの？

思い出した！！そういえばお母さんの友達ってみつちゃんって言うんだった。

みつちゃんしか聞いたこと無いから、名前がみつおだったなんて知らなかった。

「ちよつとまでよ、おっさん。たぶらかすって何だよ」

や・・・やばい・・・このおじさんは勘違いしてるし、伸行も言いがかりを言われてキレそうだ。

伸行はおじさんの胸ぐらを掴み返すと、おじさんに向けて怒鳴った。

「タブラカスってどんな食いもんだよ。貧食倶楽部のメンバーとして食べ物話をされて黙ってるわけにはいかねえんだ」

怒鳴られたおじさんは顔を真っ赤させて、目を見開いた。そして、右手を振り上げると伸行に・・・握手を求めた。

「いやーあなたも貧食倶楽部のメンバーでしたか。私もつい先日入

会したんですよ」

「えっおじさんも？」

硬い握手を交わす二人。なにやら奇妙な友情が芽生えたようだ。その後も、食べ物について熱く語りあっている。なんだかあほらしくなったので二人を後に家に帰った。

家に戻ると、居間で手紙を前に考え事をしていた。

お母さんは浮気してたんじゃないかなかったんだ・・・

しかし、この手紙はなんだったのだろう？

意外にもこの疑問はすぐに解決された。お出かけから帰ってきたお母さんが、居間に入ってきたので手紙のことを聞いてみた。

「あらやだ恥ずかしい。今度、温泉旅行でカラオケ大会があるものだから、歌の歌詞を忘れないように覚え書きしてたのよ」

「ふえ？・・・歌詞？・・・じゃあ浮気はやっぱりして無かったんだ」

「してないわよ。もちろん」

なーんだ、やっぱりお母さんは浮気なんかしない人だったんだ。

良かった良かった。

もうすぐ夕食の時間だ、大好きなチーズオムレツを食べたら、家に帰えらなきゃ。

愛する旦那と子供の元に・・・

ハートのエースは愛あるしるし〜ギャンブル編〜

彼女は二枚のカードを選び、机の上に伏せた。

「あなたが選んだカードがハートのエースなら、私は好きな人に告白しに行く。ジョーカーならあなたと付き合う」

俺はこの状況から逃げ出したくなるくらいに悩んだ。どちらのカードを選ぶかではなく力を使うか使わないかに・・・

俺には透視能力がある。だから自分の好きなカードを選ぶことなんて簡単だ。簡単なのだが・・・

こんなに悩むのならいつそ力なんか無くて運を天に任しい気持ちだった。

自分の幸せ・・・

沙奈の幸せ・・・

美姫の幸せ・・・

親友の幸せ・・・

俺の選択ですべて決まる。幸せのカードを誰に配り、不幸のカードを誰に配るか・・・

俺は散々悩んだ挙句、覚悟を決めた。俺は二枚のカードを凝視し、ジョーカーのカードを指差した。

——数時間前——

俺らはいつものように放課後の部室でトランプゲームに興じていた。名目上は天体工学部となっているが活動のほとんどは遊ぶことに費やされていた。

部活のメンバーは俺と親友の明、沙奈と美姫の4人であり。学年は俺と明が2年で沙奈が1年、美姫が3年だ。一応年上の美姫が部長を勤めているが、部長自身が遊び好きのため、今もこうしてトランプに勤しんでいる。俺も暇つぶしに明を誘って入った部活なので

活動が遊びでも俺らは全然構わなかった。

部長の美姫は活発な性格で強気な発言も多い反面、面倒見が良く気配りの出来る人でリーダーにピッタリの人物だった。しかし、俺とは反りが悪く、よく張り合ってケンカをしている。

彼女はショートカットの似合う小顔に少しつり目の大人っぽい顔立ちで、スタイルも良いためモデルに間違われることもあった。俺にはあまり感じないがモデルに間違われるくらいだから、美人なのだろう。

「あらら、また負けたのコマケくん」部長がため息をついて小ばかにしたように言った。

「小牧ですよ。イヤミ部長」俺は負けじと言い返した。

「あら、名字覚えててくれてうれしいわ。でもわざと間違えるのはレディに失礼よ」

誰がレディだよ。すぐにぶつくせに・・・

「はいはい、岩見お姉様」

俺が投げ捨てるように言うと、また言い返してきた。

「あなたみたいな不細工な弟を持った覚えはないわ」

「あらお姉様、わたくし妹でしたのよ。もうお忘れ？」

顔の横に手を当ててオホホと笑うと気持ち悪いと言って頭を叩かれた。その様子を見て明と沙奈がアハハと笑う。

「そんなことだから、ジジ抜きに勝てないのよ」美姫がため息混じりに言葉を漏らした。

「俺は遊びには本気になれねえんだよ」

「あら、負け惜しみ。なら何か賭けてみない？それなら本気になれるでしょ」

「おもしれえ。やってやろうじゃねえの」俺は身を乗り出してたずねた。

「ところで賭けるって何をだよ」

「そつねえ。勝者が敗者の言うことを何でも聞くってどう？」

「それって。逆じゃね？」

俺が指摘すると、彼女はあわてて訂正した。

「つとごめん。反対だったね」

しかし、ここで予想外の提案が飛び込んできた。

「面白そう、そのルールいいね」ルールの提案をしたのはいつもは余り口を出さない沙奈だった。

「さっきまで早く抜けた人が勝ちだったけど、この勝負は最後までジジを持っていた人が勝ちって言うのはどう？これならさっきまで負けていた裕也くんにも大いにチャンスがあるわけだし」沙奈は俺に向けてウインクをした。

「沙奈は裕也に甘いんじゃない？まっ私はどんな勝負でも負けないだろうけどね。良かったねコマケくん」

「お・・・おう・・・」俺は部長の悪態にも反応できず、気の抜けた返事をするしかなかった。

くそう・・・作戦通りだったのに・・・

俺はみんなに無い能力をもっていた。カードを見れば表を見なくてもどのカードが把握出来るのだ。だから普通にジジ抜きをすれば、最短ルートで勝ち抜けることが可能だ。そのために今までわざと負け、ここ一番の勝負に持ち込む撒き餌を撒いたのに・・・沙奈の提案がすべてをひっくり返してしまった。

この勝負、勝ち抜けないためにはジジカードを最後まで持つておかななくてはならないのだ。しかし、取るカードは選んでも取られるカードは選べない。つまり、いくらカードを把握してもジジカードを最後まで手元に置いておくことは必ず出来る訳では無いのだ。

「あ、明はどうなんだよ・・・」

「僕は・・・別にいいよ」

一縷の望みを掛けて、明に聞いてみたが結果は駄目だった。

泣き言を言っても始まらない、カードを把握出来る俺が有利なのは変わりないことだ。俺はポケットに手を入れ、映画のチケットを掴むと必ず勝つと心の中で気合を入れた。

「お兄ちゃん好きな人できたんだ」

唐突に心を読まれて、飲んでいたコーヒーを噴出しそうになった。

「お前、勝手に俺を見るなよ!!」

「しょうがないじゃん。勝手に見えるんだもん」妹は気を使う様子も無く平然と答えた。

俺の妹は俺と同じように特殊な能力を持っている。俗に言う予知能力である。妹が傘がいると言えば天気予報0%でも雨が降るし、平日に学校休みつて言えばインフルエンザで学級閉鎖になっていた。とにかく、ほぼ100%の確立で予知が当たるのだ。

しかし、本人の意思とは無関係に能力が発動するのが難点だが、妹はそんなことを気にする様子も無く、この気まぐれな能力を楽しんでいるようだ。

「良かったね。その人もお兄ちゃんのこと好きだって言ってるよ」

「そ・・・そうなのか・・・」

顔は平然を装ったが、心の中はブラジルのお祭りみたいに沸き踊っていた。まさか好きだった沙奈ちゃんと両思いになれるなんて・・・

妄想に浸っていると妹は映画のチケットと一緒に手を突き出してきた。

「はい、占料と映画のチケット代込みで5千円」

「か・・・金取るのかよ。しかも、映画のチケットなんかいらねーし」

「そう?きつとお兄ちゃんに必要なし、幸せも運んでくれるよ。こういう言い方をするのはきつとまだ何か視えたんだ。俺はしぶしぶ5千円を払うと映画のチケットを学生服のポケットにねじ込んだ。

「じゃあ配るね」沙奈は笑顔で配り始めた。

最近見なかった沙奈の笑顔、この笑顔が俺は好きだ。笑ったときの頬がピンク色に染まる様子は桜の花が咲き誇るように見え、見ているだけで春風に包まれるようだった。

いつも彼女のそばにいたい。彼女の笑顔を眺めていたい。永遠の春、それが俺の願いだ。

そのためにはなんとしても勝たなければ。勝って・・・勝って沙奈に告白する。俺の勝利報酬は沙奈を映画に誘うことだ。二人きりの時間を手にするために俺はこの勝負に挑んだのだ。

テーブルの上では、次々にカードが配られていた。沙奈が全てのカードを配り終わると一枚机の端に置いた。

「これがジジのカードね」

俺はこのカードをさり気なく確認した。間違いない、クラブのエースだ。次に自分の手札を確認すると・・・あった、ハートのエースだ。幸運にもいきなり当たり札を手にする。

このハートのエースは運命・・・妹の占い通り俺たちは結ばれる運命にあるのだ。思いがけない幸運に歓喜した。しかし、現実漫画のようにうまくいがなく、冷たいものだった。

手配の中に潜む槍の形をした黒い悪魔。その悪魔が無残にもハートのエースを貫いていた。そう、スペードのエースが手札に配られていたのだ。

ペアとなった二つのエースが無常にも山の中へと消えていった。

大丈夫・・・勝負はまだ始まったばかり、カードが分かる俺が有利なのは間違いない。最終的にダイヤのエースを持っていればいいのだ。俺は手札と気持ちを整理し、戦場へと歩き出した。

中盤戦

ゲームは着実に進んでいた。次々にカードがペアとなり、勝負は

中盤へと突入していた。順番は俺、美姫、明、沙奈の順番で、現在のカード枚数は3枚、4枚、2枚、3枚だ。4人に枚数の大差はなく勝負の行方はまだ揺れていた。

先程からどうも様子がおかしい。当たりカードは先程確認した通り、ダイヤのエースなのだが、美姫の手札から張り付いたように動かない。

偶然なのか必然なのか・・・

必然と仮定すると考えられるケースは、明が取らないのか美姫が取らせないのでどちらかだ。今のところ美姫が一番カードを残している。俺のようにカードを把握していて偶然取られないことを装っているのか？それとも・・・

勝ち抜けないためにはカードを出るだけ残しておくのは鉄則。

美姫が手札を多くすることで明に当たりカードを取りにくくしている可能性が一番高いと思えた。

仕方がない危険度は高くなるが、少し動くとするか・・・

次は俺が沙奈からカードを取る番だ。勝ち抜けないためにはペアを作らないことが鉄則だが、俺はあえて手札にあるカードを抜き取った。これで自分の手札が二枚になる。しかし、この二枚はどちらも美姫のカードとペアになるカードだ。俺は美姫にカードを差し出すと美姫は一枚カードを選んだ。当然カードはペアになりカードが二枚山へと消えて行く。美姫は残った三枚のカードを明に差し出すと、明が手札に手を伸ばした。

「ちょっと待ってくれ、岩見先輩。カードをみんなに見えないようにシャッフルして手に挟んだ状態で明に選ばしてくれないか」俺は申し出た。

「なに？明と私が組んでるでも思ってるの？」

「そういう訳じゃないが・・・念のためさ」

「まっ別にいいけど」美姫はこの申し出を受けてくれた。

美姫は言われた通りカードを隠してシャッフルすると、カードを手

に挟んで明の前に差し出した。明が一枚を選ぶと美姫は選んだ一枚を手渡した。

あの様子を見ると美姫と明は組んでいない。しかし、収穫はあった。俺に見えたのは明の表情。ほんの僅かだが明かに失敗の色が浮かび上がっていた。この勝負、美姫と俺との一騎打ちだと思っていたがそうではないらしい。美姫はダイヤのエースを取らせなかったのじゃない、明が取らなかったのだ。明が取ったのはダイヤのエース。明は場に当たりカードを回さないためにあえて取らなかったのだ。しかし、掴みたくないカードを引いてしまったため思わず顔を歪めてしまった。

これで二つの事が解った。明もカードを把握していること、そして本気で勝ちに来ていることだ。明が本気で勝ちに来ている理由・それはズバリ沙奈だ。あいつも沙奈の事を好きなのだ。

運命の神様って奴は簡単に俺と沙奈を引き合わせてくれないらしい。しかし、俺にはまだ奥の手が用意してある。まだまだ勝負はこれからだ。

——中盤戦——

ふうん、気配からしてライバルは裕也かと思っていたけど、まさか明が本気だったとは・・・

ダイヤのエースが動かないのは偶然かと思っていたけど、あの様子だとわざと取らなかつたみたいね・・・

ってことは、ダイヤのエースがジジカードで二人はなんらかの方法でカードを把握している。考えられるのはガンパイ。

このカードは使い込まれていて裏にシワが付いている。このシワを覚えることで、カードを把握しているのだろう。こんな芸当ができるのは、きっと成績優秀の明くんだ。バカの裕也には無理な事だろう。

なかなか面白くなってきたじゃない。なら、もう少し本気をだし

ますか。

——中盤戦——

明がダイヤのエースを引いたことで、俺にもチャンスがめぐってきた。沙奈があのかードを引けば俺はすぐにでもダイヤのエースを手にすることが出来る。俺が恐れるのは沙奈が引けずに終わってしまうことだ。だから引くんだ運命のかードを！！

沙奈が明の手札に手を伸ばす。

引け！！引け！！心の中で祈る。

沙奈が一枚かードを手にし、手札から引き上げた。

引いたかードは・・・ダイヤの3

残念ながら俺が望んだかードは取れなかったようだ。

しかし、どうやら神は俺に味方したようだ。先ほど沙奈が引いたダイヤの3と手札にあるスペードの9はどちらも美姫のペアとなるかード。つまり、俺がダイヤの3を引けば美姫はペアを作るしか、道が無くなる。残り二枚の美姫は最後の一枚を明に取られて退場するしかなくなるのだ。

まずは一人ご退場願おうか。

俺は沙奈からダイヤの3を受け取ると、手にある二枚のかードを美紀の方に向けた。

美姫は一枚のかードに向けて手を伸ばした。伸ばした先は・・・スペードの9。

美姫のかードはダイヤの9とスペードの3、もう勝ち目はない。

俺は勝利の笑みをこぼした。

しかし、ここで美姫が暴拳とも取れる思い切った作戦に出る。

美姫は手にした、かードを手札に加えると、平然と明に向けて差し出した。

「ば・・・ばかな・・・」思わず声を上げてしまった。

「あらどうしたの？コマケくん」余裕の笑みが俺に向けられた。

「い・・いや・・なんでもない・・」

やられた！！ここで美姫の不正を暴くことは出来ない。俺は取られたカード意外、美姫のカードを知らないことになっている。ここで、ペアをスルーしたことを申し出ることイコール美姫の手札を見たことになるからだ。

美姫の奴、やってくれるぜ。

俺に向けられた笑みを考えると、当然俺が手札を見えてることに気付いている。気付いているからこそこんな作戦に出たのだ。目には目をイカサマにはイカサマか・・

今のままでは美姫を倒せない。美姫がこの手を使えなくなるのは、相手のカードが解るようになる1対1になった時だけ。ここは耐えるしかない・・

大丈夫、まだ勝機はある。俺は唇を噛み締めた。

終盤戦

『地獄の淵の砂は、魔法の砂。それに触れてくると、強運と破滅がひっくり返る』とはまさにこのことだろう。流れの悪いこの時になんと、沙奈が一番欲しかったあのカードを引き入れたのだ。このことで戦況が一気にこっちに傾いた。彼女からダイヤのエースを奪うことが出来れば俺の勝利は不動のものとなるだろう。

なぜなら、俺には最後の切り札があった。俺はカードが二枚のときに限るが、瞬時に入れ替える技を持っているのだ。つまり、美姫がダイヤのエースを取る瞬間に別のカードと入れ替えればカードを守る事が出来る。そうなれば必然的に俺の勝ちが決まるであろう。俺は運命のダイヤのエースに手を伸ばした。

待ち望んでいた瞬間が来たのだ。俺はダイヤのエースを掴むと、一気に引き抜いた。狙い通りダイヤのエースが手札に加わる。あとはみんなが自滅するのを待つだけ・・

しかし、俺はこのとき気付いていなかった。ひっくり返ったのは

破滅ではなく強運ということに・・・

今思うと自分の力を過信していた。カードを見透かす武器とカード入れ替える防具に頼り、状況を完全に見失っていた。俺は霧の中で幻の敵に向かって刃を突き立て、身を守っていたのだ。もう少し冷静になれば気付いていたのに・・・

俺が美姫に向けて手札を差し出したとき。まさに戦況をひっくり返す一言を彼女が発した。

「そういえば、枚数おかしいね」沙奈がつぶやいた。

みんなの手札を数えると各2枚づつあった。確かにおかしい、ジギガードが一枚混ざっていない以上、総数が偶数になるのはありえないことだ。

どういうことだ・・・

誰かが一枚こっそり隠したのだろうか？

しかし、そんなことはあまり意味が無い、いずれは場に出していかなくてはならないし、前半ならまだしも後半に手札が一枚増えたらすぐにばれてしまうではないか。

行方不明の一枚を探し当てたのは明だった。明が机の端にあるジギカードに触れると、下からもう一枚カードが出てきたのだ。

まだこの時点では、回避できる方法があった。しかし、状況を把握できていない俺の心は裸も同然だった。

俺が呆然していると沙奈が仕切り出していた。

「ごめん、一枚配り忘れてたみたい。最後のカードを置いたのは私だしこのクラブのエースは裕也くんのだね」そう言うと、クラブのエースを手渡してきた。

「さっき私から、ダイヤのエースを取ったから裕也君、勝ち抜けだね」この一言で俺の手から勝利がすり抜けていった。

もうペアを作って山に出すしか道は無かった。彼女に切りつけられた一太刀が完全に致命傷となったのだ。しかし、真に恐ろしいのはここから。彼女の刀には毒が塗ってあった。ウイルスのように感染する毒が・・・

残りとなった一枚を美姫に手渡す。すると美姫が苦笑いした。

「やるわね。沙奈」

強制的に取らされた一枚は見事彼女を討つ刺客となり、彼女の体を切り裂いた。

「ここまで鮮やかに決まったら、引くしかないね」そう言うと美姫は二枚のカードを山へと送った。

残ったカードは五枚。もし美姫のカードが明のカードとペアになれば、沙奈の勝ち。違うカードなら明と一騎打ちになる。

俺は沙奈の勝利・・・いや、明の敗北を願った。

明は沙奈に惚れている。明が勝ったら沙奈に告白するかもしれない。それだけは避けたかった。

明は美姫より手札を受け取ると、手札の中に仕舞い込んだ。

そして、一枚カードを取ると残りの2枚を山へと送り出した。

この瞬間、沙奈の勝利が決定した。

「おめでとう沙奈」美姫が笑顔で沙奈を祝福した。その笑顔は曇りなどない、満面の笑みだった。

「えーと、じゃあ勝者様。何なりとお申し付けください」美姫は沙奈に言った。

沙奈は注目されるのに慣れていないのか、テレながら勝利の報酬を二人に向けて伝えた。

「じゃあ、いつも喧嘩している美姫先輩と裕也くんに今日一日デートしてもらいます。罰ゲームだから、絶対に喧嘩しないで仲良くしてね」

ま・・・マジかよ・・・

よりによって美姫とデート・・・

俺の複雑な心境とは裏腹に美姫はノリノリのようなのだ。

「分かりました、勝者様」そう言うと俺に腕を絡めてきた。

彼女の顔が近くに来ると、シャンプーの良い香りがした。美姫は上目遣いで俺を見ると「罰ゲームだし、行こっか」と言って俺の手

を引っ張った。

こんなに可愛げのある美姫は初めてだった。いつものつり目が下に垂れ、きつい印象が可愛いに変わっていた。今まで喧嘩ばかりで気付かなかったけど素直な彼女はとても魅力的だった。

俺はポケットの中の映画のチケットを握り締めると教室を後にした。

ハートのエースは愛あるしるし〜ギャンブル編〜（後書き）

運命編へと続きます。

ジジ抜きのカードがどのように移動して行ったかを知りたい人は以下のURLにアクセスしてください。

```
http://ameblo.jp/moc1942/entry-10450490409.html
http://ameblo.jp/moc1942/entry-104506917.html
http://ameblo.jp/moc1942/entry-104507934.html
```

ハートのエースは愛あるしるし〜運命編〜（前書き）

ハートのエースは愛あるしるし〜ギャンブル編〜の続きです。
読んでいない方はそちらを先に読んでください。

ハートのエースは愛あるしるし 運命編

部室には俺と沙奈が残っていた。

俺は机に散らばったトランプを片付け始めた。沙奈がまだ手に勝利の証でもあるハートのクイーンを手に持っていたので、片付けるため取るうとした。

しかし、手が滑って取ることができなかった。指が濡れた感触を感じたため、トランプを見るとハートのクイーンが泣いていた。正確には沙奈の涙がトランプを濡らしていた。

俺は彼女の涙で確信した。

「やっぱり、裕也のこと・・・好きだったんだ・・・」彼女はコクリとうなずいた。

「じゃあどうして、二人を行かしたんだよ」

彼女はしゃくりあげながら必死で言葉を搾り出した。

「美姫先輩ね・・・裕也くんのこと・・・好きなんだよ」

「だったら、なおさら行かせなかったほうが良かっただろ!!」つい声を上げてしまっていた。

彼女はさびしそうに首を振った。

「美姫先輩にはきつと勝てない・・・」

「なんでそんなこと言えるんだよ。裕也は・・・裕也はお前の好きなんだぞ!!」

俺の必死の訴えにも彼女は心を動かさなかった。

「知ってる・・・私ね・・・人の心が読めるの」

俺はすごくショックを受けた。まさか彼女が自分と同じ超能力者だったなんて。

だから、あんな芸当が出来たのか・・・

彼女は俺たちがカードを見透かせることを知っていたから、ジジのカードにもう一枚を重ね絶妙のタイミングで場に戻すことで俺たちの裏をかいたのだ。

「美姫先輩ね・・・裕也君のこと、ものすごく好きなの・・・私と裕也君が想い合う気持ちより・・・ずっと大きな気持ちを持つている・・・だから・・・きつと美姫先輩には勝てない・・・」

「勝手に決め付けたよ！！お前、勝負に勝っただろ。誰にも負けない強い気持ちがあったから勝てたんじゃないのかよ！！戦う前に逃げるんじゃないよ！！俺・・・俺・・・お前の事好きなんだ。だから・・・だから、そんな弱音吐かないでくれよ！！」

「ありがとう・・・とっても嬉しい。あなたの気持ち・・・とても伝わってくる。だから私・・・あなたと付き合いたい。あなたが私を想う気持ち・・・とても大きい。美姫先輩が裕也君を想う気持ちと同じくらい・・・」

「ふざけんな。俺はそんな沙奈と付き合いたくねえ。お前は美姫先輩と戦って裕也を奪い取って来るんだよ！！」

俺は嫌なんだ。たとえ付き合うことが出来ても、きつと彼女の本当の笑顔が見れない、そんな気がする。俺は・・・俺は彼女の桜の花のような笑顔が、見れなくなるのがたまらなく嫌なんだよ！！

「あなたと付き合えたら私・・・きつと幸せになれる」

「俺は認めねえぞ」

「私、決めたの」

彼女はそう言うのと二枚のカードを手を取った。

「あなたに選んで欲しいの、私の運命を。あなたの言う強い意志が在るのなら、あなたが正しいと思う道を選ぶのなんて簡単でしょ」

彼女は手にした二枚のカードを机の上に置いた。

「あなたが選んだカードがハートのエースなら、私は好きな人に告白に行く。ジョーカーならあなたと付き合う」

彼女が俺の目を見つめた。さっきまでの悲しい目と違い、居抜くような目だった。

神様・・・ごめんなさい、私が彼につく最後の嘘を許してください。

私が用意した二枚のカードはどちらもジョーカー。

私が彼に言った言葉は決して嘘ばかりじゃない。本当に彼なら私の事を幸せにしてくれると思ったから彼を選んだ。だからこの選択に私は後悔していない。彼がどんな答えを出そうとも、私は全てを受け入れます。

「力は、使わないでね」

彼はきつと悩んでいるだろう、けど彼が出した答えはきつと正しい道。だって私の事こんなにも想っていてくれる。

彼はしばらく答えを出さなかったが、やがて・・・右のジョーカーを指差した。

「俺はこのカードを選ぶ」

「分かった・・・」

沙奈がカードを開けようとすると、俺は彼女の腕を掴んだ。

「俺はこの右のカードを選ぶ。だから、左のカードがジョーカーなら、このカードはハートのエースだよな」そう言つと、左のカードを空けてジョーカーを彼女に見せた。

彼女は予想外の俺の答えにすごく驚いた表情を見せた。

「力・・・使ったの？」

「使っちゃいない・・・沙奈の気持ちを考えたら・・・沙奈の心が見えたんだよ。そうしたら自然と答えが出てきた・・・」

彼女はまた泣き出した。けど今度は悲しい涙ではなかった。

「ありがとう。明くんの答え、一生大事にする」

俺は頷くと彼女に言った。

「さあ俺はお前の運命を変えてやった。だから、今度はお前が運命を掴む番だ」

裕也の行き先は分かっている。さつきカードを探すときに裕也のポケットの中に映画のチケットが入っているのが視えた。

俺は妹から買った映画のチケットを彼女に手渡した。

「裕也達はきつと近くの映画館に居る。行つて、戦つて、そして勝

ってこい!!」

「ありがとう。明くん」

彼女はチケットを受け取ると教室を出て言った。

私は映画館に向かった。

私、今まで心に鍵をかけていたみたい。しかし、彼が鍵を外してくれた。その証拠に私が裕也くんを思う気持ちがどんどん膨らんでいく。きっと美姫先輩より大きく・・・大きく。

私は自分の気持ちに気がつく、いてもたっても居られなくなり走り出していた。

彼に向かつて一直線に。

扉を開けると彼が座っていた。彼は私を見ると驚いた表情をした。

「沙奈、どうしてここに・・・」

「私、気づいたの・・・本当の気持ちに・・・美姫先輩が裕也くんを思う気持ちよりも、明くんが私を思う気持ちよりも、私が明くんを思う気持ちの方がずっと強いんだって」

俺はいつの間にか彼女を抱きしめていた。彼女の体は春風のように柔らかくて温かった。

「ずっとこのままでいたい・・・」自然と言葉が溢れ出た。

「私も・・・」

しばらく二人で抱き合っていたが、彼女が俺の胸を押したので離れた。

彼女はポケットから紙を取り出すと、ニッコリ笑った。

「ここに、一枚の映画のチケットがあります。これから二人は映画を見に行きます。一人はただで映画を見れます。なので二人は勝負します」

そう言つと机の上のカードを一枚ずつ両手に持った。

「今度は二枚ともジョーカーじゃねえだろうな」

「さあねー」と言つて、彼女はおどけて見せた。

「ズルは無しよ。だから、目をつぶって」

俺は素直に目をつぶった。俺の透視能力は一枚先しか透視できない。だから、彼女がジジカードの上にもう一枚置いたのに気付くことができなかった。彼女は俺の能力をそこまで知っていた。

「じゃあ、右？左？」

「右」と答えると唇の右側に柔らかいものが触れた。

目を開けると彼女の顔が近くにあり、桜色に頬を染めていた。

「今度は私が運命を掴む番でしょ」そう言っただけで彼女は顔に桜の花を咲かせていた。

自慰シヨック（前書き）

潔癖症の女の子の片想いを描いた、ちょっとエッチな物語です。
そのためR15指定なので気をつけてください。

自慰シヨック

私がホテルのシャワー室から出てくると、智博は待ちきれなかったかのように、すぐに私を抱きしめた。部屋の中は薄暗かったが、私たちが今からする行為には少し明る過ぎた。

「もう少し・・・暗くして・・・」私が彼に頼んだ。

智博は私を離して、部屋の電気を消した。

いつもは少し明るさを残してくれるのに、今日は全ての明かりを消し真つ暗にした。不意に暗闇に包まれて動揺していると、急に唇を奪われた。

不意に襲った智博からの攻撃になすすべもなく、愛の接吻を受け入れてしまう。

智博の舌が私の唇を押し退け、強引に私の中に侵入する。彼の舌が私の中で這い回ると、心を愛撫されているかのような感覚に陥り、全身の力が抜けていった。彼は私の唇を逃がさないかのように私の体を支える。逃げる術が無くなった私は彼に身を委ねるしかなかった。

メイキングされたベッドに私を押し倒すと、バスロープの紐を解いていく。

ブルーのシーツの上に寝かされた私は、海に漂う漂流者のように流れに身を任せた。

やがて智博は私の二つの膨らみへと手を伸ばした。私の胸が揺れる度に声が漏れる。そして、彼からの責めはさらにエスカレートしていった。

私の両方の膨らみを、口と指で責めつつ余った手で私の大事な部分に手を伸ばす。

彼は私の小さな突起物を指で振動させた。振動を受けると、体の中でアロマキャンドルに火を点けたかのように体が熱を持ち、快樂の芳香が全身に広がった。

「あつ・・・もつと・・・もつと欲しいの・・・」欲望を抑え切れ無くなった私は、羞恥を忘れ彼を求めていた。

智博は私の中へと入り、体を揺らす。

もつと・・・もつと欲しい。

我を忘れるくらい快樂の渦に巻き込まれて行きたい・・・

私の望みも虚しく、私は満足出来なかった。理由は自分でも分かっていた。どうしても、彼との行為に集中出来ないのだ。

それは私が潔癖症だから・・・

昔はそんなことなかった。彼との行為に没頭出来ていた。しかし、あるきっかけから集中出来無くなってしまったのだ。

そのきっかけとは、彼がトイレをした後に手を洗わなかったことである。その現場を見てしまっただけから、彼の手が汚らしいものに感じ、行為に集中出来無くなってしまった。

潔癖症に関しては友達からもよく指摘される。世の中には無数の菌と同居していて、そんなこと気にしていたら、きりがないと・・・分かっていて・・・気持ちの問題だと分かってはいるが、頭の中に油性マジックで書かれたかのように簡単には消すことは出来なかった。

先程の行為もお互いにシャワーを浴びてからしているのだから、なんら汚いことは無い。しかし、どうしてもあのことが頭から離れなかった。

彼の事は好きだし、そんなに気にするほどの事でもないのは、頭では分かっているつもりだ。しかし、いざ彼の手を見ると細菌でコーティングされているかのように感じる。そして、彼に触れるとその部分が黒く染まり、やがて全身に広がっていくのではないかと考えてしまう。馬鹿な考えだが、私の頭から離れなかった。

智博とは合わないのだろうか・・・

しかし、彼は今まで付き合った人の中で、一番私を大事にしてくれている。彼は私が潔癖症である事を知っている。そのため、ホテルに入っても自分を押さえて、シャワーを浴びてからしか始めない。それに、私が絶頂に達したら動きを止めて、強く抱きしめてくれる。決して一人よがりな愛し方をしない人だ。今も彼は寝息を立てながら腕枕をしてくれている。

たかが一度トイレで手を洗わなかった現場を見ただけで、こんな事考えるなんて・・・

私は馬鹿な考えだと、頭から消した。

私の名前は清美。24歳のごく普通のOLだ。潔癖症以外は・・・親から貰った名前だが皮肉を感じる。確かに人並み以上の容姿をしているし、清潔を心掛けているのだが、そのこだわりが自分の心を苦しめていた。

悶々としながら過ごす月曜日。次に彼と出会えるまで後一週間。

先の長さを考えるとうんざりとした気分になった。

次こそ忘れよう。あのことを頭からごみ箱に捨ててしまおう。

そして、また快樂の海へと沈んで行こう。もう漂ってばかりは嫌だ・・・

昼休み、ふとした事で出会いが訪れた。トイレから出ると、一人の男性の姿が目に入った。

男性トイレは女性トイレ正面に有り、女子トイレと違って洗面所にはドアが付いていない。そのため、男子トイレの洗面所は中が見えるようになっていた。その洗面所で手を洗う一人の男性が目に入った。

男性はハンカチを口に挟み、スーツの袖を肘まで上げていた。そして手に石鹸をたっぷり付けると、手から肘辺りまで丁寧に石鹸で擦っているのだ。

私より丁寧に手を洗う男性の姿を見た事が無く、しばらく見入ってしまった。

歳は見るかぎり年下に見えた。整えられた髪の下に爽やかな顔が付いている。少しだけ垂れた目元が母性本能を刺激し、魅力を感じた。

初めて見る顔だった。私の会社は広告代理店なので、社外の人を見かけるのは珍しくなかったが、来客用トイレ以外で見かけるのは初めてだった。

私がしばらく見入っていると、手を洗い終わった彼が気づいたらしく、話し掛けてきた。

「あの・・・僕に、何か・・・」

彼に話し掛けられて我に返った。

「あ……いえ……凄く丁寧に手を洗ってらっしゃったので……」

私がそう言うとしろれた表情を浮かべた。

「見られていたなんて恥ずかしいなあ。よく友達にからかわれるんですよ。お前は手を洗いすぎだつて」

「いえ……清潔なのはとっても素敵だと思います」

「そういつてもらえるところいいな。僕は今年の四月に入社した牧原悠斗です」言い終えると彼は握手を求めるため手を伸ばしてきた。初対面で握手なんて、本当なら違和感があるのだが、彼の爽やかな笑顔を見ると自然なことのように思えた。

手を伸ばそうと彼の手を見た時、ゾツとした。

なぜなら、彼の手はエンゲージリングの広告に出てくるような、綺麗な手をしていたからだ。

長くて細い指に整った爪、彼の指には産毛すら生えてなかった。

彼の手に引き付けられるように触れると、触り心地のよさにうっとりとなった。

握手が終わると彼は挨拶をして去っていく。その後ろ姿を呆然と眺めていた。

それ以来、頭の中は彼で一杯になった。彼の爽やかなマスクと清潔感のある手に魅了されていた。

また会いたい……心の中でそう願った。

彼は自分で言った通り、今年の新入社員らしい。私とはフロアの違う企画室に配属されたため、今まで知らなかったようだ。

この不況の時代に入るだけあって、期待の新人らしい。得にプレゼンテーションには定評があり、内外の関係者から好印象をもらっている。そんな彼に私は惹かれていた。

二日後、偶然にまた彼と出会うこととなる。

以前と同じ時間にトイレの前を通った時、彼が洗面所からハンカ

チで手を拭きながら出て来たのだ。彼と眼が合うと、向こうも私に気づいて会釈をしてくれた。彼との接点が欲しかった私は思い切つて声を掛けてみた。

「あの・・・私、乾清美って言います」

少し驚いたような顔をしたので、慌てて言い訳をした。

「あ・・・いえ・・・以前、名前を教えてもらったのに、私の方は名乗らなかったから・・・」

「そうでしたっけ？僕は乾さんのこと以前から知っていましたよ。

美人で有名な人だつて」

それを聞いて、まるで初恋の人から告白されたかのように、頬が熱くなった。

話をするだけで心が揺さぶられるなんて、いつ以来だろう・・・
「あの・・・清美って呼んでください。みんなからそう言われているので」

嘘だ。そう呼ぶのは親しい人だけ。

「分かりました。清美さん」

彼とはそのあと他愛のない話をして別れた。その日の帰り、私はあることを決意するとデパートに向かった。

次の日の昼休み、いつものトイレの近くで彼が来るのを待った。

彼からどうしても奪いたい・・・

その思いが私を動かしていた。

しばらくすると、彼が向こうから歩いて来るのが見えた。私は隠れて、彼の様子を伺う。彼は予想通りトイレに入って行った。

こんなことするのはいけないこと……。だから一度だけ・・・一度だけ許してください。

私は女子トイレに入ると、ドアの隙間から洗面所の様子を伺った。しばらくして彼がトイレから出てくる。そして、いつものように腕を捲ると、口にハンカチを加えた。

清美はトイレから出ると、左右を確認した。周りには二人以外誰もいない。清美は悠斗に向かって近づいて行った。

悠斗はドアが開いた音に気づき、音のした方を見る。眼に映ったのは、昨日ここで出会った女性だった。その女性はほとんど悠斗に近づいて行った。そして、悠斗の眼の前に立つと口に加えていた、ハンカチを取り、軽く口づけをした。

呆然とする悠斗。しかし、その表情が次第に暗くなっていった。そして、口を開いた。

「清美さんがそんな人だったなんて・・・どうして・・・」疑問とも失望とも取れる言葉が向けられた。

「ごめんなさい・・・」ただ謝る清美。清美は手にしたハンカチを洗面所に置くと、静かに去って行った。

こうなる事は予想できた。けど、こうせざるを得なかった。

手にしたハンカチを見つめた。

このままでは気持ちがどんどん悠斗に心が傾いていく。だから、ケジメを付けるため、思い出の一品が欲しかった。

そのために昨日デパートに行き、彼が持っているのと同じハンカチを買った。そして、買った方のハンカチを彼の元に返して入れ替えたのだ。

悠斗には嫌われてしまったかも知れない・・・けど、よかったのだこれで・・・

自分に言い聞かせた。

家に帰ると、玄関に置いてある消毒スプレーを手に吹き付けた。手の消毒液を擦って広げると、アルコールが蒸発し手がひんやりとする。まるで熱と一緒にばい菌まで昇華してるかのように心地よい手が乾くと、靴を脱いで居間に向かった。

居間には母親が居て夕飯の有無を聞いてくる。要らないと伝えるとクローゼットに鞆と上着を掛けて、お風呂場に向かった。そして、

脱衣所で服を脱いで浴室内に足を踏み入れた。浴室の床を踏まないようにバスマットに乗る。シャワーの栓をひねると上から勢いよくお湯が飛び出した。

一日で最も至福の時間だ。空気中から寄り付いて来たばい菌とやっとおさらば出来る。

お風呂場から出るとパジャマに着替えた。自分の部屋に向かおうとしてふと足を止める。

大事なものを忘れるところだった。私は居間に戻ると鞆からハンカチを出して、手に握り締めた。

自分の部屋に入るとカギを閉めてベッドの上に寝転んだ。目を閉じると今日の出来事が浮かび上がってくる。

悠斗の唇はマシヨマロの様に柔らかかった。いつもは智博から情熱的なキスをしてくる。今日のキスは自分からする軽いキス。いつもと違い、キスは甘く新鮮だった。

しかし、いいことばかりではない。その後の彼の落胆した表情。もしかして、私に失望したのかもしれないと思うと心が沈んだ。

そんな思いまでも、このハンカチを手に入れたかった。見た目は何の変哲も無いハンカチ。茶色のタオル生地で柄や刺繍もなく無地だ。しかし、このハンカチはいつもトイレの後に使用していたハンカチ。これにはあの芸術のような美しい手の香りやぬくもりが染み付いている。

私は彼の手を見てからこのハンカチが欲しくてたまらなかった。

いつも洗い立ての彼の手に触れているこの聖なる布を・・・

手の中のハンカチを鼻に近づけると、石鹸の香がした。

悠斗の匂い・・・

暗闇の中に悠斗の手が浮かぶ。

あの不浄と切り離された手で私の体に触れて欲しい。彼の手で私を深海へと誘^{いざな}って欲しい。

パジャマのボタンを外しハンカチを胸元に入れると、膨らみに被

せた。その上に自分の手を置き、押し上げるようにゆっくり動かす。すると、胸から快樂の波が押し寄せ、口元から吐息が漏れた。

彼の手がハンカチを通じて、私の胸を愛撫している。そう思うと、歡喜と羞恥が入り混じった複雑な気持ちが生じた。その気持ちがいつそう私を快樂の海へと導いた。

彼の手は徐々に動きを早めた。それに合わせて息が荒くなる。まるで、砂浜に打ち寄せる波が徐々に大きくなるように、快感も大きさを増していた。

私はもうこの興奮を止めることは出来なかった。余った手が自然と敏感な部分に伸びて行く。私の手が快樂の真珠を捜し当てると、ゆっくり擦っていった。

もうその部分は準備が整っており、触れただけで快感が全身を走っていった。

悠斗の手が私の大事な部分を責めている・・・

あの白くて細い指が私を辱めている・・・

私の感覚がすべて遮断されると、海の下に悠斗が泳いでくるのが見えた。悠斗は手を伸ばし私を引っ張る。私は彼の手に引かれて、海底へと沈んでいった。

次の日、私の欲求不満は解消されていた。冷静になると、自分の欲求のために彼を利用したことをすごく恥かしく思えた。

謝らなくてはいけない・・・

しかし、どの顔で彼には会えばいいのか分からなかった。

言い出しにくいけど、正直に言うしかない。しかし、さすがにすべてを言うことは出来ない。だから、懂れていたからハンカチを欲しかったとだけ言おう。そして、ハンカチを返して許してもらおう。私は決心した。

今日は金曜日、明日になれば智博に会える。昨日のことを反省して、たつぷりサービスをしてあげよう。そのためにも、今日でケジメを付けなければ・・・

昼休み、昨日と同じ様にトイレで彼を待つ予定だった。しかし、休み直前に急に仕事が入り、少し遅れてしまった。いつも彼が来る時間まで、あと3分程度。私は食事を後回しにして、トイレに向かった。

トイレの近くまで来ると、彼がトイレから出てくるのが見えた。なんとか間に合ったようだ。声を掛けようと近づいた時、もうひとりトイレから出てきた。

出て来たのは彼と同じ企画部の人だ。他人が居てはまずい。私は二人に会釈だけすると、通り過ぎた。

その時、彼と眼が合ったが、会釈をしてくれた。話す余地がありそうな事に胸を撫で下ろした。

今回は諦めて、別の機会にするために、この場を立ち去ろうとする。その時、気になる言葉が耳に入った。

「牧村。おまえがトイレの後、手を洗わないなんて珍しいな」

私はこの一言に釘づけになり、足を止めて耳を傾けた。

どういうことだろう？いつもあれだけ丁寧に手を洗っていた彼が手を洗わないなんて・・・

すると彼はこう答えた。

「いやあ。今日は紙を使ったもんで・・・」

この意味を理解した時、私は倒卒した。

自慰シヨック（後書き）

前書き一行目は嘘です。下品ですいません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4932j/>

世にも微妙な物語

2010年10月21日21時24分発行